

『シャーロット・ブロンテの生涯』研究 (13)

メイ・シンクレア その1

芦 澤 久 江

1. はじめに

20世紀初めに、作家でありながらブロンテ研究家として登場したのはメイ・シンクレア (May Sinclair, 1863-1946) であった。シンクレアはブロンテ姉妹に心酔し、彼女たちの生涯と作品を研究し『ブロンテ三姉妹』(*The Three Brontës*, 1912) を書き上げた。彼女が描いたその評伝は今日でも多くの批評家たちに言及されている。シンクレアはブロンテの小説から多大な影響を受け、彼女自身の小説もブロンテ姉妹に負うところが大きい。特にシンクレアの小説『不思議な物語』(*Uncanny Stories*, 1923) はエミリー (Emily Brontë, 1818-48) の『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847) からインスピレーションを受けたと言われている。またシンクレアは女性参政権運動にも参加し、積極的に女性の権利を訴えた活動家でもあった。そこで同じ女性作家としてブロンテの生涯を、そして作品をどのように見ていたのか、考察してみたいと思う。

2. パトリック

シンクレアがブロンテ姉妹をどのように解釈していたかを述べる前に、彼女がシャーロットの父親パトリック (Patrick Brontë, 1777-1861) についてどのように見ていたかを考えてみたい。パトリックが変人扱いされたのはギaskell (Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65) の伝記が発端であった。そこには明らかなギaskellの意図があった。シャーロット (Charlotte Brontë, 1816-55) の作品『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) はレディ・イーストレイク (Lady Eastlake) から『クォーターリー・レビュー』(*Quarterly Review*, Dec. 1848) において「粗野」であるだけでなく「反キリスト教」でさえあると批判された。ギaskellはそのことに憤慨し、シャーロットを弁護するために、彼女のそうした欠点は、父親パトリックによるものであると責任転嫁をしようとした。そしてその独裁的で変わり者の父親にシャーロットは一生を捧げ、その犠牲になったという印象を読者に植え付けることにギaskellは成功したのだ。すなわちギaskellがパトリックを悪者に仕立て上げたのはシャーロットを弁護するための戦略であったのである。その後、事実とは異なっていることが明らかとなり、ギaskellの描いたパトリック像は修正された。それでもメアリ・ロビンソン (Mary Robinson, 1857-1944) やビルレル (Augustine Birrell, 1850-1933) は相変わらずギaskellの説を踏襲し、パトリックが自己中心的で、癪癪持ちの父親であったとし

ている (Sinclair 8)。

シンクレアはギャスケルが描いたパトリック像には否定的で、ギャスケルに反論している点は幾つかあるが、それに言及する前にギャスケルの書いたパトリックの奇癖をまずは引用してみよう。

Long before this, some one had given Mrs Brontë a silk gown; either the make, the colour, or material, was not according to his notions of consistent propriety, and Mrs Brontë in consequence never wore it. But, for all that, she kept treasure up in her drawers, which were generally locked. One day, however, while in the kitchen, she remembered that she had left the key in her drawer, and hearing Mr Brontë upstairs, she argued some ill to her dress, and running up in haste, she found it cut into shreds. (89)

これはパトリックが癩癪持ちだとする特徴的なエピソードであるが、シンクレアはこれを否定している (8)。ブロンテ夫人が他人からもらった絹のガウンを袖も通さずに引き出しにしまっていたが、ある日パトリックが鍵の差し込んだままの妻の引き出しのなかにそのガウンを発見し、わずたに切り裂いてしまったとギャスケルは語っている。ギャスケルの情報源は、バーンリー出身の召使であったようである。その召使はブロンテ家に仕えていたが、飲酒癖があり、ブロンテ家から解雇され、腹いせにパトリックの悪口を言ったのではないかと推察されている。そのため現在ではパトリックがそのようなことをしたことはなかったと考えられている。

しかしシンクレアによれば、実際にそのガウンは絹ではなく綿であり、そのうえパトリックがわずたにしたのではなく、ただ袖を切っただけで、おまけに袖をカットした後でパトリックはキースリーまで行って代わりのガウンを買って来たという (8)。シンクレアのこうした主張は誰も述べていない新説であるが、シンクレアはこれに関しては何も情報源も証拠も明らかにしていないので、この説は疑わしいと考えざるを得ない。パトリックが絹であれ、綿であれ、妻のガウンを引き裂いたという事実はどこにもなかったのである。

次にシンクレアが否定したギャスケルのパトリックに関する描写について考えてみよう。

He did not speak when he was annoyed or displeased, but worked off his volcanic wrath by firing pistols out of the back-door in rapid succession. (89)

ギャスケルはパトリックがアイルランド的気質のため、怒ると感情を爆発させ、ピストルを黙って打ち続けるのだと語っている (89)。一方シンクレアは、パトリックがピストルを撃っていたのはアイルランドでは男性のスポーツだったからであり、ハワースでもその習慣を続けていただけだとしている (8-9)。これもまたシンクレアの推察にすぎないと思われる。パトリックがハワースでピストルを所持していたことは明らかになっている。しかし彼がピストルを離さなかった理由は

別のところにあった。彼がハワースに赴任する前、ラダイツ暴動の中心であるハーツヘッドで助任司祭をしていた。そこで彼は「法と秩序」を唱え、労働者に自重するよう説いていたので、彼はつねに労働者に襲われる危険性があり、護身用として武器を持たざるを得なかった。ハワースではそのような危険はなかったものの、ハーツヘッド以来パトリックは銃を持ち歩いていたのである。

シンクレアはパトリックが痼癪を起してピストルを撃っていたとは述べていないが、スポーツとしてピストルを撃っていたと主張している。実際にパトリックがピストルを撃っていたかどうかについての真偽は現在でも明らかになってはいない。ただ、寺男ジョン・ブラウン (John Brown, 1804-55) の娘でブロンテ家に仕えていたマーサ・ブラウン (Martha Brown, 1828-80) はパトリックがピストルを撃つようなことはなかったと証言している (Scruton 63)。マーサはブロンテ家に女中として仕えていたので、もしパトリックが銃を撃っていたとしても決して事実を言わなかったであろう。それゆえマーサの証言をすべて信頼することはできないが、パトリックが教区司祭だったということを考えれば、立場上そのようなことを村人たちの前で行なっていたとは考えられない。したがってパトリックがピストルを撃っていた可能性は低いと思われる。

シンクレアはさらにパトリックが一人で散歩するのが好きだったとギaskellが述べている点 (89) について次のように反論している。

As for solitary walks, there is really no reason why a father should not take them; and if Mr Brontë had insisted on accompanying Charlotte and Emily in their walks, his conduct would have been censured just the same, and I think with considerably more reason. As it happened, Mr Brontë, rather more than most fathers, made companions of his children when they were little. (9)

シンクレアはパトリックが子どもたちを連れずに一人で散歩するのに理由などなかったが、もし彼がシャーロットやエミリを連れて行くと言えば、それはそれで非難されたであろうとシンクレアは述べている (9)。またパトリックは他の父親よりも子どもたちと仲が良かったため、子どもたちが早熟になったとシンクレアは主張している (9)。しかしギaskellもロビンソンもそれを認めず、パトリックを悪者にしたけれども、それはシャーロットやエミリを弁護しようとしたからだとしてシンクレアは指摘している (9)。

シンクレアはその当時の父親やその当時の福音主義の司祭がどうであったかを考えるように読者に呼びかけ、パトリックが良き父親であったということを強調している (9)。もし福音主義の聖職者が『ジェイン・エア』や『嵐が丘』を自分の子どもが書いたと知ったら、ショックを受けていたであろう。しかしパトリックはショックを受けるどころか、彼女たちを誇りに思っていた。だからこそパトリックはシャーロットの死後、娘の名誉を守るために伝記を書いてほしいとギaskellに頼みさえしたのであるとシンクレアは述べている (10)。

ところが皮肉なことにパトリックはその伝記作家の格好の餌食となってしまう、悪者に祭り上げ

られてしまった。これは歴史的事実であるが、シンクレアはその点を取り上げてパトリックを弁護している（10）。たとえパトリックが自分のことしか考えていなかったとしても、ヴィクトリア朝時代の父親の多くはみなそうであったのだから、パトリックがそのように見られたとしても特筆されるべきことではない、ごくありふれた事象として許容されるであろうとシンクレアは述べている（10）。

確かに、当時の父親像と比べてみれば、パトリックはそれほど悪い父親ではなかったであろう。子どもたちが何をしていたとしてもパトリックは寛容であったようである。その一方で彼らの教育には熱心で、新聞を回し読みさせたりしていた。それゆえシンクレアが指摘しているように彼らは早熟となり（9）、幼い頃から政治にも関心を持ち、父親と対等に議論さえできたのである。このようにシンクレアはギャスケル、ビレル、ロビンソンとは違い、パトリックがブロンテにとって良い影響を与え、重要な役目を果たしていたと考えている（10）。ただシンクレアが突然パトリックと息子のブランウェルを比較して、パトリックの詩はブランウェルの詩に比べればまだ良いと述べている（10）のには驚かされる。パトリックをよい父親であるという証拠として、なぜパトリックの詩とブランウェルの詩を比較する必要があったのだろうか。そのうえ、シンクレアがパトリックとブランウェルの詩を価値がないとしている点もいささか残念である（10）。今日まで二人の詩の評価は高かったとは言えない。しかし価値がないと断定することはできない。なぜならパトリックもブランウェルもブロンテ姉妹に多大な影響を与えているだけでなく、彼らの詩作品はりっぱに独立した価値をもっていると評価できるからである。シンクレアは父親パトリックを重要な存在だとして認めてはいるが（10）、そこからブロンテ姉妹の作品が生まれて来たという認識はしていないように思われる。このことはブロンテ研究において決定的な落ち度であると思われるものである。シンクレアがこのようにブロンテ姉妹の起源を見逃してしまっている点は大きな問題である。

シンクレアはパトリックを擁護しているけれども、ブロンテ姉妹にパトリックがどのように影響を与えたかあまり分析していないのは、シンクレア自身の生い立ちが関係しているように思われる。シンクレアの父親は破産し、のちにアルコール依存症となったため、シンクレアにとって、父親の存在は良い影響を与えるどころか、不幸の元凶であった。シンクレアはそうした苦難を自分自身で乗り越えたと思っていたのであろう。したがって、パトリックを表面的にしか評価していないのは、シンクレア自身の父親への尋常でない思いがそうさせてしまったと考えられるのである。

3. ブランウェル

次にシンクレアがブランウェル（Patrick Branwell Brontë, 1817-48）をどのように考えていたのか見てみよう。ブランウェルもまたギャスケルの伝記のなかでパトリック同様に、悪者として描かれたが、まもなく、ブランウェルを擁護するためにレイランド（Francis A. Leyland, 1813-94）やグランディ（Francis Henry Grundy, b.?1882）が立ち上がった。彼らはブランウェルがどれほど才能を持っていたかということを強調しつつ、ブランウェルの自堕落な人生を否定し、

彼の芸術家としての真摯な姿勢を大いに主張した。その結果ブランウェルのスキャンダルについてはいったん収束し、人々は忘れかけていた。ところがエミリの才能を高く評価していたロビンソンは再びその話を蒸し返し、彼女に都合よく利用されてしまったとシンクレアは指摘している (50)。父親のパトリック像は修正されても、ブランウェルの墮落した放蕩息子というイメージは今日でもあまり変わっていない。シンクレア自身もまたブランウェルをまったく評価せず、ギaskellと同様の見方をしているのではないかとわたしには思われる。

シンクレアはブランウェルが『ブラックウッズ』(*Blackwood's Magazine*) の編集長に宛てて書いた手紙やジョン・ブラウン宛に家庭教師先のポスルスウェイト家から書いた手紙 (1840年3月31日付) を引用している (17-9)。これらの手紙にはブランウェルを擁護したくても擁護できないような台詞が多く含まれている。どれだけふざけてブランウェルが書いたとしても、ブランウェルの人格を疑われても仕方のないほどひどい手紙である。それゆえ、もしシンクレアがブランウェルを擁護したいのであれば、ここで再びブランウェルを卑しめるような手紙をわざわざ引用する必要があったのかと訝しく思われるのである。

またシンクレアは、ブランウェルの才能についてまったく評価していない。ただシンクレアはブランウェルの詩「ペンメンマウアー」('Penmaenmawr', Neufeldt 276-79) については次のように言及している。

To be sure, when he went to into Wales and saw Penmaenmawr, he wrote to a poem about it. But the poem is not really about Penmaenmawr. It is all about Branwell; Penmaenmawr is Branwell, a symbol of his colossal personality and of his fate. (31)

シンクレアは、ペンメンマウアーこそ「彼の驚くべき性格と運命の象徴」(31) であり、ブランウェル自身であると述べている。シンクレアはブランウェルの「驚くべき性格」(31) について次のように解釈している。

For Branwell was a monstrous egoist. He was not interested in his sisters or in his friends, or really in Mrs. Robinson. He was really interested only in himself. (31)

シンクレアは「ペンメンマウアー」の詩から、ブランウェルが自分自身にしか関心のないエゴイストであったと断定している (31)。なぜシンクレアはそのような結論を導き出したのであろうか。「ペンメンマウアー」はブランウェルがロビンソン夫人 (Lydia Robinson, 1799-1859) に失恋してから、ジョン・ブラウンを連れてウェールズへ傷心旅行に出かけたときに書いたものである。確かにその詩を読む限り、ブランウェルが失恋をしてショックを受けている様子は見られない。それどころか、旅先で見た「ペンメンマウアー」のように、前向きに生きて行こうとするブランウェルの精神性の高さが強調されている。シンクレアはブランウェルがロビンソン夫人への捨てきれぬ思

いを詩に表現していないので、ロビンソン夫人にも実はまったく興味がなく、自分自身のことしか考えていないと速断したのかもしれない。

明らかに、この詩のなかにはロビンソン夫人への未練はまったく描かれていないが、それを理由にブランウェルを自己中心的だと考えるのはあまりにも短絡的だと思われる。むしろロビンソン夫人について言及していないのはブランウェルの心の傷の深さを暗示していると考えの方が自然ではないであろうか。またこの「ペンメンマウアー」という詩には明日を新しく生きて行こうとするブランウェルの真摯な姿がはっきりと見て取れる。

前述した『ブラックウッズ』への手紙や家庭教師先からジョン・ブラウンに送った手紙を比較すれば、確かにこの詩を書いた人間は別人だと思われるであろう。ブランウェルは、シンクレアも指摘しているように、ジョン・ブラウンを喜ばせたくておどけた品のない手紙を書いてしまうことがあった(18)。しかし批評家たちが考えるほど、ブランウェルは人生を気楽に過ごしてきたわけではなかった。彼はロビンソン夫人に失恋する以前から大きな悲しみを背負っていたのである。それは姉マライア(Maria Brontë, 1814-21)の死である。マライアが死んだときから、彼はつねに喪失感を抱えていたのだ。彼の初期作品には、マライアのイメージがさまざまな登場人物となって幾度となく現われ、マライアの死から逃れられないブランウェルの姿がはっきりと見られる。そしてブランウェルはついに見捨てられた人間として「神などないのだ」と宣言するまでに至る。

姉マライアの死から、彼はこの世の不条理に悩み続けていた。なぜマライアが死ななければならなかったのか、ブランウェルは神に問い続けた。彼はシジフォスの神話の不条理も知っていた。そのうえ自分が招いた過ちとはいえ、家庭教師先も鉄道職も首になり、画家になることもできずに、ブランウェルには神の存在を信じられる瞬間は訪れなかった。だからブランウェルは「神などない」と彼の作中人物アザレルに叫ばせたのである。

ブロンテ姉妹の側に立って考えれば、シンクレアが述べているようにブランウェルは自己中心的な人間のように見えるであろう。アルコールに依存し、次から次へと職業を変え、借金までつくり続けたブランウェルは間違いなくブロンテ姉妹の頭痛の種であった。そのうえ家庭教師先の女主人と恋愛し、おまけにふられ、傷心旅行と称してウェールズへ呑気に旅に出かけ、反省の色はまったく見られない。自堕落な放蕩息子ブランウェルは確かにいたかもしれない。しかし一方でブランウェルの詩に見られるように、姉の死からいつまでも逃れることのできない繊細な心をもったブランウェルもいた。シンクレアは、ギャスケルがブランウェルを酷評したことを批判しているが(41)、シンクレア自身もブランウェルを真に理解しようと努めていないように思われるのである。

前述したように、シンクレアの父親は破産してからアルコール依存となった。ブランウェルの自堕落な姿はシンクレアに自分自身の父親を思い出させ、ブランウェルに悩まされたブロンテ姉妹と自分の身の上を重ね合わせて考えたにちがいない。それゆえブランウェルをエゴイストだったシンクレアは述べたのである。

4. アン

シンクレアはブロンテのなかで最も悲劇的だったのはアンだと述べている。アンは生活記録がなく、手紙もあまり残されていない。しかし宗教がアンを挫折させたとシンクレアは主張する (39)。アンはひたすら宗教の苦しさ、恐怖、きびしい要求だけに耐え、実際には『アグネス・グレイ』(Agnes Grey, 1847) のなかで描かれている喜びや幸福さえ夢見ていなかったというのである (39)。またアンはブランウェル同様に才能がなく、ブランウェルが重くアンにのしかかっていたとシンクレアは見ている (40)。

アンはソープグリーンで何を見て、何を聞いていたのであろうかとシンクレアは問うている。シンクレアはディムネ (Ernest Dimmet, 1866-1954) が語るそのときのアンについて述べている。アンは兄が道ならぬ恋で疲れ切っているということを見ていた。しかし兄のその相手はアンにやさしく、またブランウェルには天使のようにやさしかった。だからブランウェルの行ないはその相手に対するひどいお返しだとアンは思っていた。アンは兄が酒に溺れ、アヘンに手を出し、気が狂っていくのを見ていた。ブランウェルはモルヒネマニアによくあるエロチックな幻想に取りつかれる徴候を示していた。しかしアンは幻想と墮落を区別することはできなかった。これはディムネの意見であるが、証拠がまったくないのでシンクレアはディムネには同意していない (41)。シンクレアはブランウェルの行ないをシャーロットとアンは驚くほど無垢な気持ちで話していた。ブランウェルが最悪な状態に陥ってしまったのは感情的になったからだ二人は考えていたとシンクレアは述べている (41)。

アンは一般的にやさしかったと言われているが、彼女は限りなく大胆であったとシンクレアは述べている (45)。アンは作品『ワイルドフェル・ホールの住人』(*The Tenant of Wildfell Hall*, 1848) は大胆さという点でヴィクトリア朝中期の文学のなかで際立っていて、比肩すべきものはない。アーサー・ハンティンドンという破天荒な人物を主人公に据えるというアイディアそのものが革命的であったのである。

アンは道徳という問題を扱うのに革新的だっただけではなく、宗教においても叛逆者であった (Sinclair 44)。永遠の罰の教義を信じないことはヴィクトリア朝時代、福音主義のなかではほとんど無神論者とされていた。ディーン・ファラー (Fredelic William Farrar, 1831-1903) が『永遠の希望』(*Eternal Hope*, 1892) を出版し、それは正当派に爆弾を落としたが、それより前にアンは爆弾を落としていたのであった (Sinclair 45)。

アンはカルビニズムに縛られ鬱状態だったと言われるが、シンクレアは、それを病気だったと考えている (45)。そのためアンはエミリが達した精神的高みにまで上り詰めることはできなかった (Sinclair 45)。アンとエミリは仲が良くムーアをいっしょに歩き、離れられない存在であった。アンはやがてエミリの思想に傾倒され、安らぎを見出していったのであるとシンクレアは結論づけている (46)。

シンクレアのアン分析はブランウェルの分析に比べればはるかに素晴らしいものだとわたしには

思われる。シンクレアが指摘しているように、アンは大胆であった。なぜなら『ワイルドフェル・ホールの住人』は、当時としては実に大胆な不倫や家庭内暴力をテーマに扱っていたからである。さらにその作品には万人救済説というアンのメッセージが込められており、カルビニズムからすればまったく異端的主張であった。したがってアンが大胆であったというシンクレアの指摘はまさに正しい。しかしアンがエミリから思想的影響を受けたという点はどうであろうか。エミリはどのような宗教にも頼らずに、自分独自の世界をつくり、揺るぎない自己の神を創った。シンクレアが指摘しているように、アンがカルビニズムに支配されていたときには、人生が重荷でしかなかったというのは間違いのないであろう。しかしアンはエミリに影響を受けたのではなく、万人救済説に触れることにより彼女の世界観は大きく変わり、その結果安らぎを手にすることができたのである。だからこそ『ワイルドフェル・ホールの住人』を書く気もちになったのではないであろうか。もし兄のブランウェルを含めてすべての人は救われるのだという確信を持てなければ、『ワイルドフェル・ホールの住人』をアンが書くことはできなかったとわたしには思われるのである。

5. シャーロット

シャーロットについてシンクレアはいくつか興味深い点を述べている。まずシャーロットのブランウェルに対する態度である。ブランウェルは村の死にそうな少女に会いに行き、彼女に寄り添い讃美歌を歌ったりして彼女を慰めた。家に戻ったブランウェルはそれをシャーロットに話すと、シャーロットが冷たい目で彼を見たというのだ。そうしたシャーロットの態度からブランウェルは家に帰りたくない気もちになり、居酒屋に入り浸るようになったというエピソードである。これはブランウェルがサー・ジョージ・サール・フィリップス (Sir George Searle Phillips, 1815-89) に語った話として紹介されている (Sinclair 50-1)。このエピソードの真偽は確かめられていないが、一般的にはシャーロットがブランウェルを見放していたと伝えられている。しかしシンクレアはそのようなことは認めていない (51)。

さらにシャーロットについて別のエピソードがある。シャーロットが作家となり、サッカレーの家に招かれたときのことである。シャーロットは頭痛がすると言ってソファに横になり、家庭教師以外とは誰も話さなかった。結局サッカレーはシャーロットに業を煮やし、彼は家を抜け出しクラブに行ったという話がある。見方によれば、これはシャーロットの風変りな一面を表わしているであろう。しかしシンクレアはシャーロットが家庭教師を見てかつての自分を思い出し、そのような家庭で、そのような社交場で、家庭教師が置かれた肩身の狭い気まずい立場に対するやさしさから家庭教師と話すことになったとシャーロットを弁護している (52)。

またシャーロットは本当に子どもが好きだったのかと疑問視する批評家たち、ジョージ・ヘンリ・ルイス (George Henry Lewis, 1817-78)、スウィンバーン (Algernon Swinburne)、ビレルに対してシンクレアは反論している。ビレルは自信をもって「ミス・ブロンテは子どもが好きではなかった」と述べている (67)。そもそも彼らがこうしたことを話題にするのは、シャーロットの作

品に描かれる子どもや子どもの生活が不十分だからである。

シンクレアはシャーロットが子どもを好きではなかったという説に反対して、シャーロットの子どもにまつわるエピソードをいくつか述べている。シャーロットは友人のアミリア (Amelia Ringrose Taylor, b.1818) の家族とスコットランド旅行に出かけたとき、彼らの子どもの具合が悪くなり、途中で引き返したことがあった。その後シャーロットがウラー先生に宛てた手紙に (1853年8月30日付)、もし引き返さずに、その子どもに取り返しのつかないことがあったら自分を許すことはできなかったであろうと書いていた。それをシンクレアは証拠として、シャーロットが子どもを好きではなかったということはないと主張している (56)。しかしこれは同時にシャーロットが子どもを好きだったという証拠にはならない。シンクレアの主張はしばしばこのように論理的でないことがわかる。

次の証拠についてはどうであろうか。シャーロットがホワイト家で家庭教師をしていたときに、子どもを抱きながら、自分の愛情が次第に深まっていくのを感じたと述べている。またギaskellの娘ジュリア (Julia Gaskell) とも愛情を通わせていた。これらのことを楯にシャーロットが子どもを好きではなかったとは言えないとシンクレアは主張している (57)。シンクレアが述べたこのエピソードは確かに証拠の一端を担っているかもしれない。

さらにシンクレアは子どもに対する愛情はシャーロットの性質を解く鍵になると述べている (56)。すなわちシャーロットの欠落した部分を見るのではなく、彼女の深い闇を見ることになるからである (Sinclair 56)。シャーロットは子どもを怖れていたし、扱いは下手であった。しかし批評家たちはシャーロットのペイソスを見逃しており、家庭教師先でシャーロットが嘗めた辛酸を考慮しなければならないとシンクレアはシャーロットを擁護するのである (58)。

シンクレアの意見を完全に否定することはできないが、シンクレアはシャーロットが子どもを好きだったかどうかということに執着して、問題の本質を忘れている。スウィンバーンが問題としていたのはシャーロットが子どもを好きか嫌いかということではなく、シャーロットがどのように子どもを描いたかということである。スウィンバーンが述べているように、シャーロットは子どもに対する母性を十分に描いているとは言えない (52)。オリファント (Margaret Oliphant) は、シャーロットの子ども時代の特異な環境にその原因があると指摘している (66)。シャーロットは幼い頃に母親を亡くしただけでなく、村の子どもとも遊ばずにきょうだいで過ごしていた。それゆえ普通の子どもたちの生活を描くことが困難だったということは容易に推測できる。だがシャーロットが子どもを物語にうまく活用していないのは、子どもを好きか嫌いに因るのではなく、子どもに本質的な関心がなかったからであろう。『嵐が丘』と比較してみれば、エミリとの違いが明らかである。

エミリは決して子どもを好きではなかったであろう。しかし『嵐が丘』の大半は子どもの物語である。キャサリンとヒースクリフは時間も忘れて荒野を駆けめぐった。エミリはキャサリンが言っているように、子ども時代に戻りたかったのである。すなわちエミリの関心は子ども時代という過去に向いていたのに対し、シャーロットの関心は未来に向いていたと言えるのではないであろうか。

そうした点から言えば、シャーロットの関心はヒロインの結婚を描くことに終始していて、物語は結婚に向かって収斂されていく。オリファントはシャーロットが結婚したくてたまらなかったと述べているが、シンクレアは彼女の解釈に憤慨している。シンクレアの主張によれば、作中人物やシャーロットの手紙からも、シャーロットが結婚したがっていたという証拠は何もなく、シャーロットが手紙のなかで結婚の話題をするのは、ほとんど友人のエレンのためにアドバイスするためであった(66)。しかし批評家たちはシャーロットの恋愛関係を暴くことで、彼女の謎を解く鍵にしようとしたのである。そしてその結果、ついにエジェ氏を突き止める。リード(Sir Thomas Wemyss Reid, 1842-1905)はシャーロットのブリュッセルでの鬱状態を説明するのに彼女が恋愛をしていたのではないかと仄めかした(60)。¹ レイランドはブランウェルのせいでシャーロットが落ち込んでいたのではないという反証として、シャーロットのこの恋愛話を利用した(2: 39-41)。マカイ(Angus Macay)はシャーロットの小説はフィクションではなく事実であったと述べた(36)。さまざまな批評家がシャーロットの恋愛を暴こうとしたけれども、ショーターはこの件に関しては否定していた。恐らくショーターはニコルズからブロンテの遺品を借り受け恩義があったので、ニコルズへの配慮から、シャーロットの恋愛については沈黙を守ったのであろう。さらにシャーロットの手紙にある「抑えられない衝動」や「自己中心的な愚かな行動」はエジェへの許されぬ想いを意味していると解釈された。ところがシンクレアは、当時ヴィクトリア朝時代、家で必要とされているのに、女性が家を離れることは罪であったので、シャーロットは家族を残しブリュッセルへ旅立つことに良心の呵責を感じ、それを「自己中心的な愚かな行動」だと感じていたのだと反論している(74)。

仮にシャーロットが実際エジェ氏(Conatantin Georges Romain Heger, 1809-96)に恋をしていたとしても、シャーロットはホームシックにかかっていたのではなく、エジェ夫人(Mme Zoe Claire Hger, 1804-90)の振る舞いに悩まされていたのであろうとシンクレアは考えている(79)。ところが興味深いことにシンクレアはエジェ氏がシャーロットに無関心だったとするショーターの説には納得していない(80)。それどころかシャーロットがエジェにとって魅力的だったからこそ、エジェ夫人がシャーロットに嫉妬していたというのである(Sinclair 80)。それならばシャーロットには何の責任もないわけである。そのようにシンクレアはシャーロットの道ならぬ恋を認めようとはせずに、エジェへの想いは単なる友情にすぎなかったと述べているのである。

シンクレアはいずれにしてもシャーロットのエジェ氏への想いを認めたくはなかったのであろう。なぜならば、シャーロットが妻子持ちの男性に恋をした女性であった場合、シンクレアの唱えるシャーロットの聖女像が崩れるからである。そのためにさまざまな理由づけをして、事実を歪曲してしまっている。シンクレア自身が道徳に囚われていて、シャーロットの不道徳と解されるような行動に理解を示すことができなかったのである。

6. おわりに

シンクレアは章分けをせずに書いているので、ポイントがわかりにくく散漫になっている。また出典をはっきり示していないために、どこから情報を得たのか特定するのが困難である。しかし明らかにマーガレット・オリファントの説には強く異を唱えている。シンクレアは、オリファントが、つねに結婚のことしか考えていなかったという間違っただけのシャーロット像を提示したことに憤っていたようである。オリファントが述べていることがすべて正しいとは限らないが、シャーロットに結婚願望があったことは事実であり、なぜシンクレアはそれほどオリファントを敵視しなければならないのか。シンクレアには想い描く理想のシャーロット像があり、シャーロットは清らかな聖女でなければならなかった。それゆえ少しでもシンクレアにとって不都合な事実を隠し、シャーロットを弁護しようとしている。このようにシンクレアはギaskellやその他の批評家が事実を歪曲して伝えていると指摘しながらも、自分自身が同じ過ちを繰り返しているのである。

前述したように、シンクレアの解釈には彼女自身の生い立ちが深く関係している。父親が破産し、アルコール依存となっただけでなく、病気のきょうだいの面倒も見なければならなかった。彼女はシャーロットの伝記を読んで、自分の境遇と重ねあわせ、運命というものを感じたようである (Miller 92-3)。またシンクレアは家族を支えながらも作家としての道を切り開いたシャーロットを彼女自身のロールモデルとしても考えていた。シンクレアはシャーロットを心の支えとして自分の運命を切り開いたにちがいない。だからこそシャーロットはシンクレアにとってつねに純粋でなければならなかったのである。

しかしさまざまな解釈を許容するのではなければ、シャーロットの実像は矮小化してしまうであろう。シンクレアのシャーロットについての解釈はそうした伝記の問題を浮き彫りにしていると思われるのである。

注

1. シンクレアはリードがシャーロットにはブリュッセルに恋人がいることを仄めかしたと述べているが、実際にはリードはそのようなことは述べておらず、むしろ否定している。(Reid 60)

引用文献

- Birrell, Augustine. *Life of Charlotte Brontë*. London: Walter Scott, 1887.
 Gaskell, Elizabeth C. *The Life of Charlotte Brontë*. Penguin English Library, 1975.
 Leyland, Francis. *The Brontë Family*. Vol. I and II. London: Hurst and Blackett, Publishing, 1886.
 Macay, Angus. *The Brontës : Fact and Fiction*. London: Service & Paton, 1897.
 Miller, Lucasta. *The Brontës Myth*. London: Vintage, 2002.
 Neufeldt, Victor. *The Poems of Patrick Branwell Brontë*. New York & London: Garland Publishing Inc., 1990.
 Oliphant, Margaret. *Victorian Novelists*. London: Blackie & Son Limited, 1899.
 Reid, Wemyss. *Charlotte Brontë: A Monograph*. London: Macmillan and Co., 1877.
 Scruton, William. *Thornton and the Brontës*. John Dale & Co. Limited, 1898.
 Shorter, Clement K. *Charlotte Brontë and her Circle*. New York: Dodd, Mead and Co., 1896.

『静岡英和学院大学・静岡英和学院大学短期大学部 紀要第13号』

Sinclair, May. *The Three Brontës*. London: Hutchinson and Co.,1914.

Swinburne, Algernon. *A Note on Charlotte Brontë*. London: Chatto & Windus,1897.